

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18700657

研究課題名（和文） 授業における学習方略の獲得過程に関する実践的研究

研究課題名（英文） A practical study on learning process of learning strategies in lessons

研究代表者

魚崎 祐子（UOSAKI Yuko）

早稲田大学・人間科学学術院・講師

研究者番号：20386650

研究成果の概要（和文）：本研究では小学校の授業において、子どもたちが学習方略を獲得していく過程、およびそれを助けるための教師による関わりについて検討した。その結果、教師が学習方略を伝えていく上では、自らが有効だと考えていたり、実際に使用していたりするものに関する発話が授業中にも多く見られ、教師自身の持つ学習方略が子どもたちに影響していると考えられた。また、子どもたち同士で真似をしあいながら方略を身につけていくという姿も見られるが、その際にも教師が子どもたちをつなぐ役割を果たすことがあると考えられた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated how pupils get their learning strategies in lessons and how teachers help them. The results showed that teachers often speak about the strategies in lessons which they think effective or they often use, which influenced pupils' learning strategies. In addition, pupils often learn as their friends do, and learning styles are shared in a class. In such cases, teachers sometimes help them by introducing other pupils' styles, which reflects the teachers' sense of value.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	308,600	0	308,600
2007年度	1,191,400	0	1,191,400
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	570,000	3,970,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：科学教育・教育学 ・ 教育学

キーワード：学習方略の獲得、学習方略の認知、学習方略の使用、教師の関わり、学びあい、授業研究

1. 研究開始当初の背景

テキスト読解場面における下線ひき行動や授業中のノートテイキングなどといった

学習中にとる様々な行動は、必要な場面において有効に活用できる学習者とそうでない学習者との間に、学習成果の違いを生む

ということが明らかになっている。そのため、学習者がこれまでの学習経験の中で、このような学習行動を方略として獲得することができたかどうか学習成果と関係していると考えられる。

そこで、適切な学習方略を持ち、自分自身で学習活動を組み立てていくことのできる学習者を育てる必要があると考えられる。このように学習活動を自ら組み立てていくことのできる学習者は、教育場面が多様化し、様々な形態の学習活動が可能となる時代変化の中でより求められているといえるだろう。しかし、受け身型の学習者が多いということもしばしば指摘される問題である。学習への取り組み方、中でも学習方略を身につけていく上では、意識的であれ、無意識的であれ、学校生活、中でも多くの学習活動を行う授業時間を通じて形成されるものが多いと考えられる。そこで方略について、授業を通じてより体系的に教える機会が確保されれば、その後の学習者が使える方略を伝えることができるのではないだろうか。しかし実際には、学習方略についての教授は学習内容についての教授に付加される形で行われていることが多いと考えられる。したがって、方略の指導に関しては教授者の明確な意図が不足していたり、学習者への伝わり方が曖昧であったりすることにより、学習者のとる学習行動が方略として有効に機能しない一因となっているといえるだろう。

2. 研究の目的

本研究は授業場面を通じて、子どもたちが学習方略をどのように獲得していくのかを明らかにすることを目的としたものである。学習方略を適切に身につけることは、高い学習成果を上げることと結びついていると考えられるが、昨今、高等教育の場面においても適切な学習方略を身につけられていない学習者の存在が問題となっている。そこで、学校生活の始まりである小学校をフィールドとし、どのように方略を獲得しているのかを明らかにしたい。また、学習者の方略獲得において大きな影響を与えと考えられる教授者や他の学習者の関わりとの関係を明らかにすることにより、適切な学習方略を備えた学習者を育成するための教授活動のあり方についても検討することとした。

そこで、以下の4点より教師が子どもたちをどのようにとらえ、どのようなアプローチを用いて方略の指導を行っているのか、また子どもたちはどのように学習方略を獲得しているのかについて明らかにしていくこととした。

- (1) 子どもたちの学習方略使用状況についての教師の認知

- (2) 教師の学習方略への認知や使用状況と子どもたちの学習方略認知や使用との関わり
- (3) 教師による学習方略の指導
- (4) 子どもたち同士の学びあい

3. 研究の方法

本研究では、小学校における授業を観察し、教師の教授活動および子どもたちの学習活動を記録することにより、子どもたちがどのような学習方略を身につけており、それらはどのようにして獲得されているのかについて検討する。その際、教師の発話記録、板書情報、配布物の内容、子どもたちの発話、ノートや配布物への書き込みなどを手がかりにした。

そこで、授業観察時に観察記録をとるとともに、教室の前後より2台ないし3台のビデオカメラで授業の様子を記録し、さらに教師にはICレコーダを装着してもらい発話記録を残した。これらを合わせて毎授業後にフィールドノーツを作成した。さらに毎授業後に児童のノートおよび配布物を回収し、書き込みの内容についてはデジタルカメラで記録した。

また、認知面についても探るために、学習方略に関する質問紙調査も併用することとした。そこで、学習方略の使用あるいはその有効性の認知についてたずねる質問紙を作成し、子どもたちによる自己評価を行ってもらった。また、各児童の使用あるいは認知について教師はどのように捉えているのかを探るために、担任教師には児童1人1人について評価してもらった。さらにこれらの調査結果をもとに教師へのインタビューを行い、相違の生じた背景や教師による解釈について、データの補足をおこなった。

4. 研究成果

- (1) 子どもたちの学習方略使用状況についての教師の認知

教師が子どもたちの学習方略の使用状況についてどの程度の確に認知しているのかについて調べるために質問紙調査を行った。子どもたちが自らの学習方略使用に関してどのように認知しているのか調査を行うと同時に、担任教師に対しても各児童の学習方略使用をどのように捉えているのかについて調査を行った。

その結果、教師が1人1人の子どもに対する見取りに力を注いでいても、児童自身の認知とは相違の生じる項目が多く、教師の回答と児童の回答とが一致したのは約半分の項目であった。また、教師が「わからない」と回答した項目も多く見られた。教師はこのように各児童の細かい点についての的確に捉えることの難しさを指摘し、クラスの始まった

4月だけでなく、クラス形成の進んだ7月においても同様の傾向が見られることが明らかになった。また、授業中の発言など目立った行動の多い児童に比べ、自分からの動きが少ない児童については、教師が的確に把握するのが難しく、回答のズレも多くなりがちであるということがわかった。

これらの結果より、授業中に学習成果をより高めるための取り組み方について教授、助言を行う上で、有効な情報となる個々の児童の現状を把握することの難しさが示され、クラスの子どもたちに応じた学習方略を適切に教えていくことの難しさが明らかになった。

(2) 教師の学習方略への認知や使用状況と子どもたちの学習方略認知や使用との関わり

学習方略の有効性に対する教師の認知や使用状況が、子どもたちに学習方略を教える上でどのように影響しているのかについて明らかにするために質問紙調査を行った。一学習者としての教師に対して、学習方略の有効性の認知や日頃の使用状況についてたずね、クラスの子どもたちに対しても同じ質問紙に回答してもらった。その結果、教師が重要だと考えていたり、教師自身が日頃用いている方略はそうでないものに比べ、子どもたちも重要だと捉えたり、使用していたりすることが明らかになった。また、子どもたちによる有用性の認知と使用状況との間には相関がみられ、学習成果につながると考える方略の使用を多く用いるということがわかった。

(3) 教師による学習方略の指導

授業内の教師の発話をプロトコル化し、そのうち学習方略の使用に関わるものを抜き出した。また、それらを(2)で用いた質問紙に挙げられた方略に関するものとそれ以外の方略に関するものとに分類した。その結果、(2)において教師が有効だと捉えていたり、使用していたりする方略に関する発話は、授業内での教師の発話に多く現れることがわかった。このことから、授業を通じて教科内容とともに学習方略についても教師が自らの価値観を交えつつ伝えている様子が明らかになった。

また、教師が必要だと考えていない方略を習慣的に子どもたちがとるために、その場におけるその行動の必要性を否定する発言も見られ、それまでの学年における積み重ねにより、子どもたちの中に形作られた授業中の行動というものが習慣として現われていると考えられた。この傾向が高学年のクラスにおいてより見られたことから、これまでにごしてきた学級で形作られてきたのでは

ないかと考えられた。これらの行動は、それまでの教室における教師が有用だと捉えて教授していた可能性も大きく、ほぼすべての科目を担当教師が担当する小学校においては特に、担任教師の価値観が子どもたちの学習行動を形作っていくのではないかと考えられた。これは(2)の結果と合わせて考えると、担任教師の持つ学習方略のバリエーションの大きさによって、クラスの子どもたちの獲得できる学習方略の種類や内容に大きな差を生み出す可能性のあることを示唆しているといえるだろう。

(4) 子どもたち同士の学びあい

教室という学習共同体の中で学んでいくことを考えると、教師による教授の他に、他の子どもたちの影響が考えられる。そこで、子どもたち同士の学びあいがどのように生じているのか、またそのような学びあいを促進するために、教師はどのような支援を行っているのかを探った。

子どもたちの意見を交換する話し合い場面を対象に、他者の考え方や取り組みをどのように取り入れているのかを検討したところ、座席の近い子どもを中心に真似をしあいながら他者のやり方を取り入れ、それが定着していくこともあるということがわかった。席替えにより近くの席の子どもが替わることにより、影響を受ける子どもの存在も入れ替わったことから、座席の配置は重要な要素だと考えられるだろう。また、そのような子ども同士のやりとりを促進するために、教師はすぐれた学び方を取り上げてほめたり、教室に掲示したりすることによって紹介し、共有を助けるという行動が見られた。このように教師が介在しているパターンでは、直接的な指示ではないものの、教師の価値観による影響を受けながら、学級の中に広がっていくと考えられた。また、口頭でのやりとりだけでなく、それを可視化できるように黒板や配布物を利用して記録を残し共有化することも、1人1人がバラバラに学習を進めるのではなく、集団としての学びを高めていく上で、子どもたち同士の学びあいを助ける手立てとなっていると考えられた。

以上4点から検討を重ねてきた結果、授業を通じて子どもたちが学習方略を獲得していく過程における教師の存在の大きさが明らかになった。教師は目の前の子どもの実態にあった方略指導をしていくことが求められるが、何十人もの児童それぞれに応じた指導をしていくことは容易ではない。今回、クラスの子どもたちの認知面・行動面ともに、的確に把握することの難しさが示されたことから、それらをふまえた指導を行っていくことの難しさが明らかになった。

そのような中で、教師が学び方について子どもたちに伝えていく上では、方略を体系的捉えて伝えていくというよりも、自らの価値観や経験が大きく影響しているということがわかった。これは教師自身がこれまでにどのような方略を身につけ、活用しているのかを無意識のうちに反映しているということである。言い換えると自身の持たない方略について子どもたちに紹介し、教授することは非常に稀だといえるだろう。今回の研究においても見られたように、それまでに会った教師の価値観や経験に基づいた行動が子どもたちの習慣として定着していくこともある。特に、多くの科目を1人の担任が担当する小学校では、授業で出会う教師の数が限られているだけに、出会った教師の持つ方略の種類によって、その後子どもたちへの影響も大きくなることが考えられる。したがって教師は時に学習者としての自身をふりかえり、自らの持つ学習方略のバリエーションを増やしていくことが求められるだろう。

また、子どもたち同士が真似をし合いながら、学び方を獲得していく形では、教師による直接的な教授に比べると影響は少ないものの、そこにもやはり教師の価値観が影響することがあるということがわかった。教師がこのような過程に介入する上では、自らの価値観に基づいた抽出だけでなく、他の子どもたちから捉えられにくい子どもの姿をも紹介するなど抽出の基準を増やすことで、より多くの学び方にふれる機会になり、様々な学び方を獲得する機会につながり得ると考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計6件)

魚崎祐子 児童の話し合い参加を支える教師の働きかけ - 6年生の国語科における事例 - , 日本教育工学会研究会, 2010年3月6日, 広島大学

魚崎祐子 小学生の話し合い場面における座席表の利用 . 日本教授学習心理学会第5回年会, 2009年6月19日, 東北福祉大学

魚崎祐子 児童の学習方略使用と教師の関わり . 日本教育心理学会第50回総会, 2008年10月13日, 東京学芸大学
Yuko UOSAKI・Tadashi ASADA The Cognition of Pupils and the Teacher on the Use of Learning Strategies. The Australian Association for Research in Education 2007 International Education Research Conference, 2007

年11月27日, The University of Notre Dame Australia

魚崎祐子 授業中の発表に対する児童・教師の認知と意見共有方法の検討 . 日本教育工学会第23回大会, 2007年9月23日, 早稲田大学

魚崎祐子 学習方略の利用に関する教師と児童の認知 . 日本教育心理学会第49回総会, 2007年9月17日, 文教大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

魚崎 祐子 (UOSAKI YUKO)

早稲田大学・人間科学学術院・講師

研究者番号: 20386650